

江戸末期の菓子普及状況－「馬琴日記」にみえる菓子について－  
別府大短大○江後迪子 共立女子大 吉川誠次

目的 和菓子は江戸期にほぼ完成したとされているが、一般庶民にとって菓子の普及がどのようなようであったかを知るため、「馬琴日記」に見える菓子について調査した。

結果および考察

「馬琴日記」は、文政9年（1826）より嘉永元年（1848）まで書かれたようであるが、現存する詳細な日記は文政10～12年（1827～1829）、天保2～5年（1831～1834）、嘉永元年4月～2年5月（1848～1849）である。この8年分について出現菓子数を調査し、煎餅、干菓子、饅頭、餅・団子、飴菓子、その他に分類した。最も多いのは、餅・団子の152回、ついで他の菓子の127回、煎餅、干菓子、饅頭とつづき、飴菓子は7回と著しく少なかった。経時的に見ると文政期に比べて天保4、5年には菓子出現総数は著しく増え、菓子の種類も多様になっていて、庶民への菓子の普及は天保期以降と考えられる。江戸名物として名高いとされる「竹村煎餅」「烏飼饅頭」「窓の月」なども天保期になって1回ずつ出現している。同時期の横浜の「関口日記」と比較すると「馬琴日記」では餅・団子が著しく多く、これは下戸で甘党であった馬琴の好みとも考えられる。